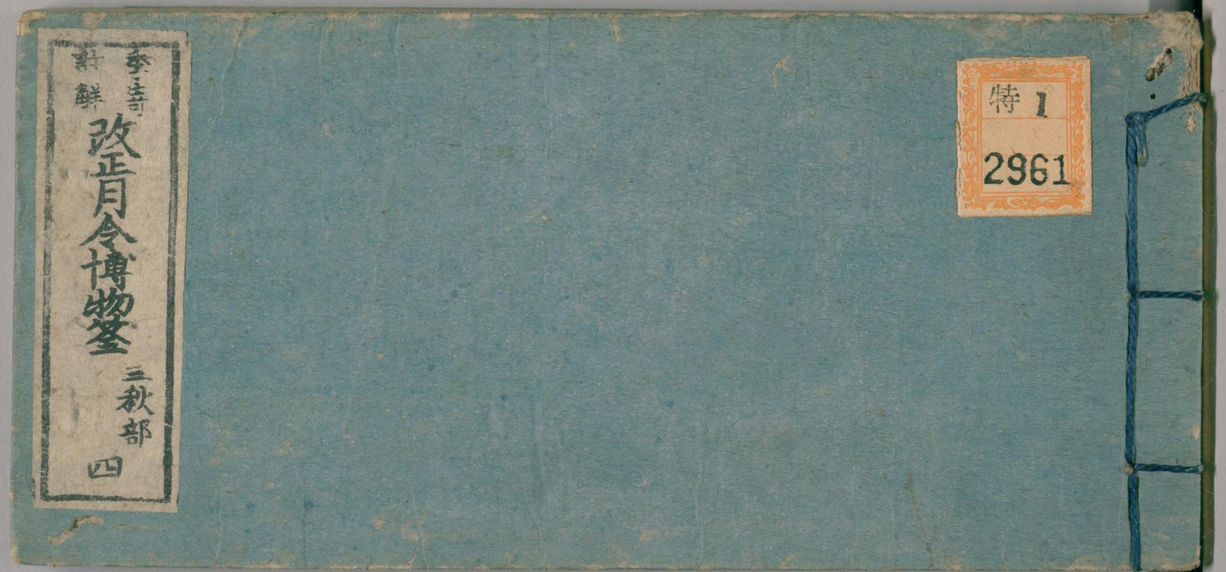
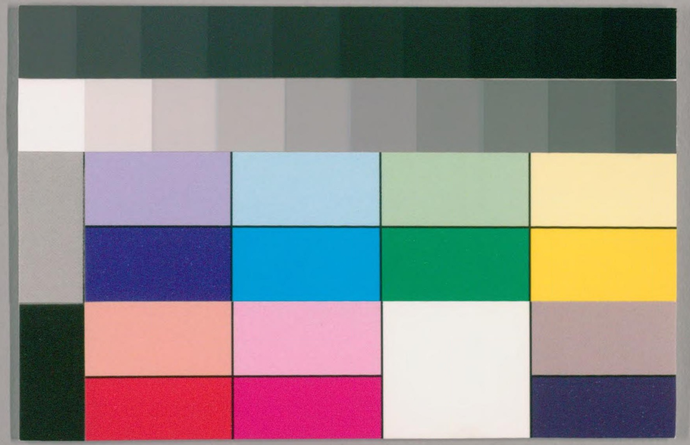
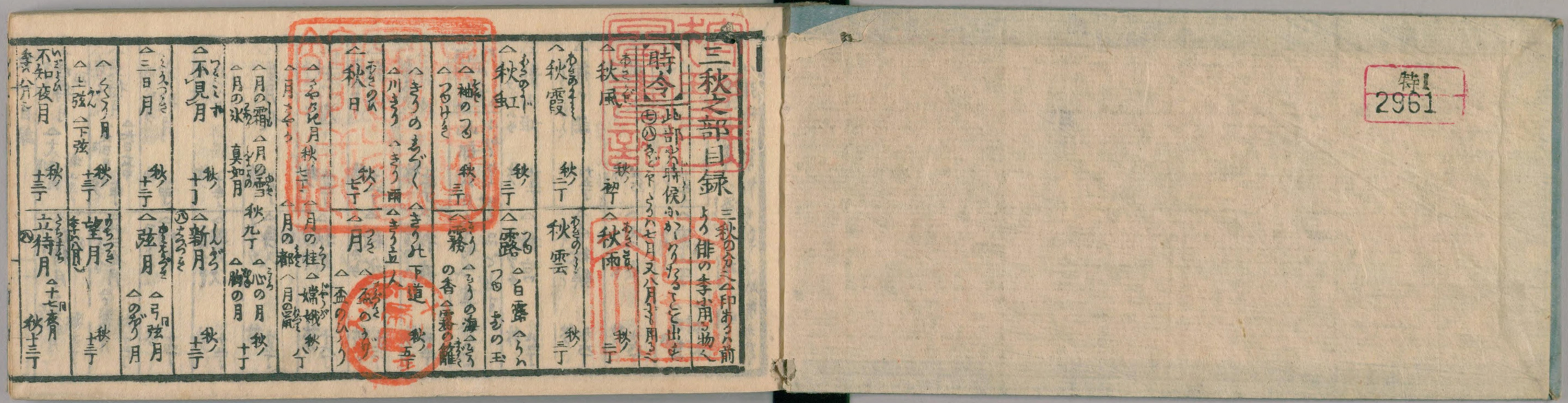


特1
2961



国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用



三秋之部目録

三秋の分へ印あり前より俳の季に用ゐる物へ

【時令】

此部は時候かゝりのことを出せり（但し七月又八月も用ゐる）

秋風 秋 初一
秋雨 秋 二丁
秋雲 秋 二丁
秋霞 秋 二丁
秋虹 秋 三丁
露 白露 玉の玉 秋 三丁
霧 霧の海 霧の籬 秋 五丁
きりのまがき 秋 七丁
きり 附 下道
きりの海
きり雨
きり立人
秋日 秋 七丁
月 盃のかげ
名乞月 秋 七丁
月の桂 嫦娥 秋 八丁
月の都 月の宿
月の霜 月の雪 秋 九丁
月の氷 心の月 秋 十丁
真如月 胸の月
不見月 秋 十丁
新月 秋 十二丁
三日月 秋 十二丁
弦月 弓張月 月のゆり月
上弦 下弦 秋 十二丁
望月 秋 十二丁
不知夜月 秋 十二丁
待月 十七夜月 秋 十二丁

特1
2961

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△居待月 △十八夜月 秋十三丁
△伏待月 △寝待月 秋十四丁
△更待月 △九日月 秋 十四丁
△三夜月 △名月 秋 十四丁
△有明月 秋 十四丁
△待月 秋 十四丁
△残月 秋 十五丁
△照月次 秋 十五丁
△星月夜 秋 十五丁
△身入 秋 十五丁
△秋の聲 秋 十五丁
△秋野 秋 十六丁
△秋山 秋 十六丁
△秋水 秋 十七丁
△秋夕 秋 十七丁
△秋夜 秋 十七丁

混雑

此部ハ日令時令草木ならざる品を出す

△龍田姫 秋 廿五丁
△秋宮 秋 廿五丁
△律の調 秋 廿五丁
△千秋樂 秋 廿六丁
△鶉衣 秋 廿六丁
△田の廡 秋 廿六丁
△小田守 秋 廿六丁
△案山子 △嚇鷺 △鳥おどし 秋 廿六丁 △鳴子 △添水
△引板 秋 廿七丁 △燒飯 秋 廿七丁

草本

此部ハ三秋ふさふる草木をいづ

△荻 秋 廿八丁
△柾 △柾葉 秋 廿八丁
△薄 △あのそよぎ △一もと薄 秋 廿八丁
△蓼の羽そよぎ
△糸薄 秋 廿九丁
△葛葉 △葛の裏秋 廿九丁
△蔓 秋 卅丁
△蔦 秋 卅丁
△忍草 秋 卅丁
△景天草 秋 卅二丁
△芭蕉 秋 卅二丁
△鶏頭花 秋 卅二丁
△草花 △千種の花秋 △百草の花 卅二丁
△白茅 △茅萱 秋 卅三丁
△雁来紅 秋 卅三丁
△萱 秋 卅三丁
△萱刈 △萱草 秋 卅三丁
△角觜草 秋 卅四丁
△萩殿 △萩の戸 秋 卅四丁
△犬子草 秋 卅四丁
△鬼灯 秋 卅五丁
△花壇 △花菖 秋 卅五丁
△若烟草 秋 卅五丁
△新番椒 秋 卅五丁
△萱 △軟生姜 秋 卅六丁
△布瓜 秋 卅六丁
△羊 秋 卅六丁
△牛房引 秋 卅六丁

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

△頭の芋 秋 卅六丁
△暮蝉 秋 卅六丁
△雫 蘂子 秋 卅七丁
△耳語 秋 卅七丁
△梨子 △水ノ△青色 △木色 △山梨 秋 卅八丁
△辺江色 △生浦色 △秋の妻色
△秋田 △田ノ色 △稲 △高章ノ花 秋 卅九丁
△稲 舟 △稲刈
△落穂 秋 卅九丁
△稲扱 秋 四十丁
△稲莚 秋 四十丁
△喬木 秋 四十丁
△新米 △こゝ一米秋ノ △青米 四十丁
△稲扱 秋 四十丁
△綿取 △木綿ヲ秋 四十丁
△桃吹 秋 四十丁
△鵙早贄 秋 四十三丁
△鵙おとし △目ヲ秋 四十三丁
△禰田 秋 四十三丁
△鳴 △時の初ル △百舌ヲ秋 四十四丁
△鵜 △片ゝ △かけゝ △熟亀秋 四十四丁
△ゝゝ但 △ゝゝの声
△鱸 秋 四十四丁
△鮭 秋 四十四丁
△江鮭 △小瀧秋 四十六丁 △瀬走
△鯔 △九万足 秋 四十六丁
△鶲 秋 四十六丁
△鶫雲 秋 四十六丁
△鷹繋 秋 四十七丁

秋生類

この部ハ二秋ハりそ生るゆゑなり

△鹿 △麑 △麻台 △麻垣秋 四十丁
△妻乞麻 △森の声
△紅葉鳥 △みきゝう △かせき △もぐら
△鵙 △百舌ゝ秋 四十三丁

三秋目錄終

○五節句祝譯

一五節句そ祝ふ事いつゝもも陽月ゑれがかりそれ陽ハ生成の道にして陰ハ粛殺の謂ゆゑ陽の数ハ一三五七九の奇数ゆゑ陰の数ハ二四六

八十の偶數ふ故ふ陽と扶け陰を抑ふる術ふ陽月陽日ふ食ふる物ふ陽物を食して陽と旺ふし陽を扶く先春餅草餅粽索餅栗等の物と供御ふ獻ることふ故ふ節供ふいふ江家次第ふ委く見えたり正月ハ七日とりて節供の初めとす清少納言の枕草子にも粥の節供ふくつくるも此事なりそもそも正五九月と三長月や定らまふるハ仁明帝の御宇承和三年の詔とぞ

秋之部

三秋のふ之ハ不可つゝのハ約ふる儀の意ふ

時令

此部ふ名時候ふ事ふ多ふを以て也ふ

八七月ふ八月ふ事ふ多ふ

秋風 秋の風ふそびゝくふ故ふ名ふ

秋風のふきうごかすまでもなくてあまたをそよろかすにもよめり

俊定

後拾遺 ふるさとの庭ふ秋風ふきにけりあれたる宿ふ荻ふそよぐ

秋ふハ風の吹ことそゝ也

詞 荻の葉 荻の下葉 楠の葉 田の面ふ海茅生ふ多ふ 籬ふ小萱 机ふるふ 村の秋風 野邊の松ふ 秋の末葉 門田の稻葉 荻の葉ふ

新後撰 雨居秋風 二条為内

人目ふ松宿ふ荻ふそよぐとて秋ふハ風の吹ことそゝ也

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

(連) 秋風のきのふもまがふ紀巴
(俳) 秋風や麓へ行の妻こうれん 園女
(狂) 夕ぐれしが門のやくまでをつまでつまるつれて秋風ぞひく 自由

(詩) 秋風五字對句

山樹含斜日 晩風連救氣
池風澄早涼 新月照邊秋

(詩) 秋風七字對句 詩礎

秋風江上濤無際 白雲飛
暮雨舟中酒一樽 風滿樓

(詩) 秋風詞 杜牧

琪樹西風拂筆秋 金井梧桐先已下
楚雲湘水棟同遊

(連) 秋風や藪も畠も不破の関 芭蕉
(俳) 秋風や酒肆に詩うたふ漢あり 蕪村
(狂) 秋風や酒肆に詩うたふ漢あり 蕪村

(詩) 秋風詞 杜牧

琪樹西風拂筆秋 金井梧桐先已下
楚雲湘水棟同遊

(詩) 秋風歌一曲 掩明鏡 昨日少年今白頭

(秋) 夫木

秋風のそよひくもとの村雨を
なくなくまちて日ふらしぞ千首 秋雨打窓 師兼

小夜ふくる窓の雨

(連) 秋風や藪も畠も不破の関 芭蕉

(俳) 秋の雨雨の降日を窓の雨 秋雨打窓 丁圃

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

(狂) あゝ秋となるやいなやむらの村雨もさがも秋田もいそがしくなる常磐

(詩) 五字對句 同上

晴山疎雨後 白雲當嶺生
(ハレタル山ニサッと雨ノ後ノ白雲ガ嶺ニ生ズル)

秋樹斷雲中 黃葉遠階風
(アキノ木ニ木カタエバノコモレノ中ニ黃ニ色ヅイタ葉ガ庭ニ風ガフク)

(詩) 七字對句 詩

九曲暮雲連雁宅 秋風飛葉下蟲牀
(イクエモ立コメタ日ノ雲ガ雁ノ宿ト云フ山ニニシキノヤウニ見エテ秋風ガフキ蟲ノ床ニ落ル)

一帆秋雨落錢塘 帶雨秋風入海涼
(一ハンノ帆カケ舟ガ秋雨ノフル日錢塘江ニウカンデ江ニラチガ明ケル)

秋霞 朝あさのうす霞(ぐもり)くと もしくやけまべ濁れるのさうなうつくしき日和よし。朝天雲のやはる紅葉やけもう二三日のうちは雨ふる。故やけ西あるくて少(すこし)まれぐできて

日和(ひより)〜霞(かすみ)のく春 秋立(あきたつ)朝(あさ)の十六日やう雲(くも)〜 秋更(あきふけ)ぬる 西(にし)より雨(あめ)ふる。雲(くも)の動(うご)くを見(み)ては雨(あめ)あるなり。朝(あさ)ぐもり 立(たて)ていた雲(くも)なり 秋雲(あきぐも) 低雲(ひくきくも)東(ひがし)のそら 出(いで)ぐ雲(くも)よはげきて

虫(むし)ぐ〜の鳴(なく)こゑ 風(かぜ)ふくこと 雨(あめ)ふること 雲(くも)のうごき 天河(あまのがは)をうつくしくみゆる 雨(あめ)あるなり

(秋)ふかむまでもあらじと今(いま)のうの秋(あき)のことさや雲(くも)とならん〜 基綱

露(つゆ) 白露(しらつゆ) 秋(あき)のうつゆ 一つ色(いろ)けき

(異名) 陰濕(おんしつ) 玉露(ぎょくろ) 玉滴(ぎょくてき) 白露(しらつゆ)

露(つゆ)のふかき 秋(あき)の末(すえ)九月(くがつ)時令(じれい)の一(ひと)つに蟲(むし)〜もろ〜(もろもろ)白露(しらつゆ)いかゝなるらん 秋(あき)

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

空のこゝろはよしなしごとをそゝ
露の玉ゝはなんそゝ神の
露に神をそふるをも神のまもり
るをもつゝもあれ露のをそさ
るしくりのくもりたるもよ
て袖よりもゆるさばかり
激湍を隔露のうつろふあ
ぶつまのつゝこゝろ亜露亜
潤るまたまのおくれかち
又ふそゝいふなり

秋 建仁歌合 寂蓮

時雨つゝゆく日のつゝろふ神さえて
ふるさとしぐれ露もしぐれあくのもり露

千五百番歌合 通具

おぐらやまけさより村雲かゝりて
入日うごくしぐれそめつる

負應百首 濃茅露 為家

おくはかりやをれそふ渉りの
もゞ葛にてくる色のそゝ亜
夫木 名を露 僧正幻恵

露ぬきのかゝれる小萩そゝろなる
なの露ふる窓ろやそゝ月う
後拾遺 朝露 二

そゝしく来つゝ折ふす萩の上露
移ろひやすくぬるゝそゝ袖をり

千首 荘春 為尹

秋風とそゝる萩の枝そゝろう
一しほまくる秋のそゝろ色

新葉 寄秋露玉 清輔

玉田原をけるしのそゝろ
ねのくれがきゆる露のそゝろ亜

続 ぬれ〳〵ぬるゝ萩のうき葉。ふるさと萩。
月やどるそゝろ。萩こぼすそゝろ。萩の上露。萩
露のうつろふ。菊のこゝろ。菊の上露。菊
ゆれそゝろ菊。紅葉露の下源。そゝ露
の亜さゝ。小笹の露。笹の上露。
笹原 うちなびくのくさぐさいづこ
くもとそゝろくうちなびくの
露のあるさえたゝ人さう

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

朝皃 えだのまきうす　なでしこ 露のめぐみにさく

荻 をぎの葉風　蓬 よもぎへの花ゆ

忍草 新の名のべ みぞさく露　女郎花 女のとめ よみ洞ま

たとへ 浅茅 花ゆをかちりよ うつりゆくきちるが袖まそく露

古郷 古きさと 露の古るさとあさぢが花のよも ぎふの月のまへべき かのまヒ一面かは

庭 庭まくる人なし まを露 よしよみり

尾花 袖の露 まけをぶらしも あまぎ ふのらめまけけしくも

悲 袖の露潤ともちらくのようりその 外暮ヶ哀れなく露とう

みてうろきなみにみたう人志のびて志ある そくのなにを新の名のべの花ゆ、

なぞらへまうきを花ゆの口のきえや らぬふひをうろ袖きえうりもの

無常 その葉みれうろき露を もみ ゐろうう世花を

どうき草の名ちまさきが本の中へ 露のなきんをふひなげ世の露み なきんのをもうげのこるとも

狂 誰かみつるさきにめぐみせもふを 光りなまみきむれむ露　常樂菴

連 露へふ紗氷のなの縁を有る　紹巴

詩 露 七字對句　詩礎

直望明河臨象闕・露未乾

ツクトアマノガハヲミレバ禁裏ノ御門ヘサシカヽツテアルヤウナ　ツユガ一タカハカヌ

誰霑零露捧金盤・雨露清

タレカ天上ノ露ヲ金バンニウケテ天子ヘサヽグルゾ　フツタツユガキヨイ

光泛月華明徹曙・玉露秋

ツユノヒカリガ月ノ色ヲウカヘテアキラカニアケテアル　タニノヤウニツユノヲク秋ヂヤ

氣晴天宇暗生寒・白露偏

ツユノキガホゾラニキヨクシテドコトモナシニサムサヲオボエル　シラツユガカクベツフカイ

詩 五字對句　同上

桂香多露裏・夕陽飄白露

カツラノ木ガカホレバツユガツンデアル　ユフ日カゲニシラツユガヒルガヘリ

石響細泉迴・樹影拂青苔

イシニヒヾクトハ少シノイヅミノナガレガ巡ルヂヤ　ジユ木ノカゲアヲイコケヲハラフ

露故事（つゆのこと）

陰陽氣勝

陽氣勝ツトキハ散ジテ雨トナリ露トナル陰氣勝テバ凝テ雪トナリ霜ト成ルナリ

金莖（キンケイ）漢ノ武帝承露盤トテ器ヲ銅ニテ高サ二十丈ニ作リ建章宮ニテ一夜天ノ甘露ヲ兼テ玉屑ニ和シテ飲タリトアリ

霧（きり）　△きりの海△きりの香△霧のまがき△きりれまく△きりの下庵△川ぎり△きり雨△きり立人。立ハ霧之縁ハ霽也天気下り地应ぜざるを霧と云發して天応ぜざるを霧といへり皆霧の變じてなるなり秋ハ霧と霽ハあつくして朝夕のきりあり甚多き所ハ必ず霧掠れ△きりの笆ハ物を包みそて見るかけ△霧の海湖のごとくなる海のごとくなりと云△きりの香ハ霧に香あり△きり立れるとぞそろへをりへ△霧の雫るきり立のぼる所に物のぬるをるといふ△霧の立ちきれきりの立ゐる所の夜を行る也△川きりれ川の立つる霧なり△きり雨ハ小雨のごとくふる霧をいふなり

千五百番歌合　　俊成
霞みえし江のまのとやまはれゆかば霧のまがきをあらふあきかな

建保百首　　光俊
朝日さす遠方のむら霧を分け出でほのぼのと見ゆる秋の山郎

霧中紅葉　　西行
錦かる秋のさかえとみせぬ霧まがふのこきりは園をはらみて

建保百首　　家隆
浪よするしほのつまの袖垣のさゝわけ霧の立ちはなるゝ

詞　さゞなみたつ。こむる。籠る。八重（八重霧ハ八重立つ）。へだつる。にほふ。立遙。立のぼる。立ゐ。きりの立える。霧ま消行。うき立霧。きりなきみひ。霧ぞ分くれる。しく霧。霧のきり。山をかくす。明石

の浦 朝日山。入相のうへの霧立る

きりさめの秋の旅人 月 朝日 朝ぼらく

りの日 朝霧〳〵上山のもみぢ 月 朝ぼらけ

えつむの月 上 月の風 風そよぐ秋の風より

そよぐの立つもの 払露ひゞく。

尾上に霧 霧深き谷。海 波のうき

霧の籬 きりのまがき 川 秋風

の霧たちて …… 身代など

の霧のうら …… し

秋の母 松むしの声 蘇 …… 声の

連 風いで朝霧まし 園の松 専順

俳 霄闇や霧の …… の鳴海潟 其角

狂 ねきりや桐のまうたの ……をとゞり …… 雄長老

詩 霧頌 伏誕

水霧雜山烟 水ノ上ノキリガ山カラ立ツケフリトヒトツニナツテ

冥々不見天 ニテソラモ

聽猿方 …… サルノコエヲキイテハヤ……

聞瀬始知川 カハツ瀬ノ水ヲトヲキイテ始メテカハ川トシリタル

漁人惑漁浦 リヤウシハオキテウラヲミワケズ

行舟迷沂沿 センドウハフネノボリニヨフサガリニヨフ

日中氣靄靄 ヒルゴロニカノキリガハレテシレタレバ

空水共澄鮮 ソラモミツモイツシヨニスミワタツテ見エタ

△秋 月

あきのあ 凄月 …… 月 …… のあさを

秋の …… 西陵 …… 秋の月 …… 日

秋のうき …… 潘 …… や

とききをまつ …… し

歌 秋の …… の …… と …… が

まで …… 袖の …… 花宗

俳 秋の日や …… 長櫓 雪光

狂 今 …… 瀬 …… 臭衛

七 …… 秋の日 ……

△月 つき

月 …… 淮南子 出

…… の …… さやけ

き月 月さや …… 和名 月

す男 ……

そしき（登玉の出）○たきんおもし藻（玉藻の出）△から
ら（雲英撰）月かゝりの花（続林玉藻集）

異名 嫦娥 張衡霊憲 丹桂 十五夜 太平御覧
素娥 ○玉兎 困学紀聞 玉丸 酉陽雑俎
蟾蜍 三輔黄図 金波 漢書 玉兎 詩
金精 ○金環 白氏六帖 銀盤
圓魄 全詩 ○氷鏡 ○氷輪 東坡詩集
水氣 淮南子 ○望舒 淮南子 ○夜光 天問

月をゑんげつの形と偏へのし脚 春は
朧よりかゝりて萋は靄雲月を蔽ふ
霜人を援して終に月を賞するに富る
秋は萬の物くもりなく光さやかに其時の
景を始秋の今気を以て月いまゝく
明らけしよろく月とのこいへ詩歌
連歌よりは三秋に渡る殊に八月を
七月の後の月の名又十五日は一月の
中なり。暑気も退く月影に満て
夏文熱聚の十一ヶの月きてうまんぞ
八月の都に存しゝ望月を賞
する詩歌連歌其外くうきを

○上弦下弦 月の暈 月の盈虚るの
まんげは共く薄物筌 王生 熈時記 にまま
○有明 月の色の彩を月 潢る
宵中なる之彩代巻り見くより
今盈のうげ今盈の光とみはさのくとは
月の面の月の空のこまれいより
て新光みなぐてけ今日のうて月盛の
月の移るの時に定めて遠見の月の分
をとへき
に淺う

故事
月桂 ツキノカツラ 酉陽雑俎ニ曰 月ノ中ニ桂ノ樹アリ高サ五百丈其ノ本ヲ斧ヲ以テ伐人アリ其ノ名ヲ呉剛ト云フ常ニ伐ルニ斧ノアト伐ルニ隨ツテイエテツイニ伐リツクスコトヲエズト云ヘリ依テ○カツラ男○又ツラノ花マタハ○カツラノ モミヂ 又ハ○カツラノカゲナド、イヘルヨシナリ

歌 久かたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてり増るらん 忠岑

(連)露ならや月の袖のそれやらん 昌叱

(俳)学斎(ノ)月のかつら折ありし 許六

嫦娥

羿ト云フ人不老不死ノ薬ヲ西王母ニ請ヒ得タルニ羿カ妻ノ嫦娥ヌスミ服シテ月ノ中ニ奔リノボリタリト云フ故蟾ナリ事文類聚ニ出ヨツテ月ノ異名ヲ嫦娥ト云ヘリ

月都

(俳)浅世絶ゟ日月天の客觴(ノ)後 撫正

曲翁ありし面乃垣隣ハ七盞ゝそ 正九

(発)夫木 為家

到りかる老の雁ゟ月ぞとゝまる

もゝの蓮ゟ月ぞとゝまる

(俳)ろうたき月の郭の女郎花 貞室

同もゝへみそかこゝろ郭ゟ巴峡

月鼠

譬喩經ニ曰ク慶ニ逐レタル人野中ノ井戸ニ落入ント

レテ草ニトリツキタルニ黒キ鼠ト白キ鼠ト右テカノ草ノ根ヲ齧カノ黒キ鼠ハ月ニ白キ鼠ハ日ニコレ月日ノ早クタツタトヘテリ月ノ鼠ト云事此經説ヨリ起レリ

(発)我たのむ英の根をとむ嵐ぞと

ろへ月のうらめしきかな 俊成

(俳)月の嵐ゟ仕置已勢ゝ 惟然

月の霜

月の地ゝ姫が君ゝ仰ぐをゝの人

(発)松さひしろけ行ゟもひきて

月ぞふる〳〵霜と見えたり 冨仲

(俳)あゝ〳〵そそび月の素袍哉 木故

(狂)玉墨の袈裟騰もこりるぞう〳〵

月のひうりんまつもろこし雨 令波

(詩)李白 牀前看月光 ユカノ光デミレバ

疑是地上霜 ア、リサヘミユルユヘ地ニシモノヨイテルノカトウタガフ

挙頭望山月 フリアフムイテミレバ

低頭思故郷 サレツムイテハ故郷ノコトヲモヒ出ス

月の雪　月の光ふるを雪と例ふるをいふ

月の霜とはしらぬなり

(秋)雪なべたるしら物とみるをいふ　秋の月夜　三王

(戀)さえくとふけ行月のさまこそ如泉

(冬)寒ろ〳〵と月のさすは夜なきされてでてゆきの深くふるく　真海

月ノ氷　月のひかり氷をいふ

(夏)月きよく都の秋をみるとせば氷をしける心地こそすれ　後成

真如月　まことはものゝ真実なるを如と云月雲なくてさえ

もし俤をつゝみ清くうるみなく一切の妄想うすく清き心を真如の月とものべたり

(秋)夫木　家隆

ひさしく澄もし月もさやうつゝ

心月　真如の月よりおこりて清きをいふ

(秋)をしまるゝ心の月にくらべ出るなり　信實

明月　心月のごとく無明の月の晴てかゞやくをいふ

(戀)無明の月夜の空とは　野散

不見月　浮雲そらをおほひて月を見ざるをいふ

(冬)いとゞ小雨の雲ゝそふらんきく時雨のふる夜の月のさやけき　景天

(詩)七字對句　詩礎

四野霧凝空寂寞　空對酒

野ニ出テ四方ヲミレバ月ノナイ夜ハムナシウサビシイ　ムナシク酒ヲノムバカリジヤ

九霄雲鎖絶光輝　懶登樓

ソラ一メン二雲カオホフテ月ヒカリヲヘダテンレフタ　ツキヲミル気モナイ

月ノ詩秋連俳

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

㊎金葉　　皇后宮肥後
月を見ておもふこゝろのまゝならば　ゆくゑもしらずあくがれなまし

千載　　実家
秋乃夜のこゝろを浅くおもへばぞ　そのかり見ゆる山の月よる

続後撰　　知家
さながらしぐれし夜乃林しまばらに　月うつろふしのかげやもりくらん

続古今　　為家
見るまゝに秋風さむし　天の原　中にて渡る月の夜ぞふけにける

続拾遺　　衣笠
かさゝぎのとわたる橋も白妙の　ちる霜いそぐ秋の月かげ

玉葉　　西行
人も見ぬよしなき山の末までも　さすらん月のかげをこそ思へ

続千載　　俊成
身につもる忘れぬ月の影ぞうき　よるもひるもあはれ露のふるさと

新古　田家見月　　前太政大臣
風わたる山田の庵(いほ)をもる月や　穂なみをむすぶ氷なるらん

月清　池上見月　　後京極
池水をいとふ光りをよくすむらん　末代やうきみはの月かな

㊂詞
月のかつら。月のよるく。月のをがさ。月結ぶ。月のさうり。月の舟。紅をえ
てらし。月さけの影。月のろう。月の新。月ふかき。月まつ男。月の出しか
月の入しか。月の都。月の色。月の球。月清し。月のかげ。ホのめく。
月白き。かくるゝ。朧。天てる月。夜けつる月。ゆふづく夜。上乃ゆみはり
下の弓はり。かたわれ月。三日の月。出入る月。入る月。入さの月。光
ゆく月。いざよふ月。もみぢ月。夜半の月。かくろふ月。とまる月。ふゞき
月かけ。まとゐ見。まどろみ見。月をながむ　見まがふ。さすらふ男。

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

連 窓さく世ごゝろ月出る夜の月 宗碩
うるさくも月のうちなる秋の水 宗祇
名を見さく月のうちなる秋の水 宗祇
憐 きりぐ〳〵もろびも出よ水の月 を来
櫻ごろもろびも出よ草の月 芭蕉
月の座をも移すあるじかな 素堂
ゆくをうく就出よあすの月夜る 此筆
月うれしや家の姿を月夜哉 去来

狂 にっぽしをにっぽしとは出つゝ
にっぽしとの月うらごろの月 真木
うれさやう墨つきやうにそ
なんど入るる月の夜まるる 信海

詩 月ノ詞 東坡

一更山吐月 ヨヤジブンニ山カラ月ガ出ル
玉鏡卧微瀾 玉ノカゞミガサヾナミニ
正似西湖上 湧金門外看
テウド西湖ノ上ノユキンモンノ外ヲ

詩 月ノ詞 李白

小時不識月 チイサイトキ月ト
呼為白玉盤 月ヲ白玉ノ盤
又疑瑶堂鏡飛上青雲端
タヽ玉ノウテナノカゞミガ青雲ノ

詩 待月五字對句 同上

玉鈎鳴風久 白是登樓早
金輪出霧遲 非干出海遲
新月 纖眉 破鏡 おれる
王狗盧全詩集一巻 古詩

新月もひへ連儞ひへ八月十五夜と
ゝゝ詩ひへ新月西月とり三日
月の月そのひへ攀徳鎧が詩ひへ
新月沉鈎細と他ゝう新月
ひへあざやかる月ゝゝひへ
ひへ待のでゝく三日夜中新月の

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

秋 一月

と俗にいふ三日月をいふ名月の事
勿論とよろづ新月の濁月とも
朏とも魄ともいふ
(津)新月 織々抹黛眉 こんの三日月
三日月 朏魄(文選) (異名)蛾眉 朏朒 若月 多事出
○月三日にて魄とうたひとろくの
この月大きなれば二日を月始めと
よめる歌の月小さければ三日を明らか
なる月とよめる歌とあるは三夫事出
(秋)蛾眉 女の眉のごとく細くやさしきを
まゆのごとくそへていふ三日月のうつくしきを
(俳)捨ても捨ても猶捨て三日月 文考
人参のきゝめかぞとや三日の月 支國
三日月やねぎまの外の小さき 芭蕉
(津)蜘蛛の巣の消えくさうげきや 鶴老
鶴ぶくの三日の月うけ 夏彼

弦月
このゆふ月ゆくゆく月
(異名)蛾眉 白雪南 輪民 杜詩 韋缺
淮南子 如彩文選 恒月 詩經 朏魄
二月。上弦とも八日を毎月七八日ともなり下弦とも八廿三日ともいふ 歌名
弦月の孤まの夏七夕月の孤弓を張るとも張月とも
(秋)月を弦ともゆみはりの弦のごとくいふ事歌
(津)秋七月あさがほ月のうつくしかりけり 来
望月 詩歌にては望月にて秋をいふ
十五夜のごとく月色連俳ともに秋八月十五日をいふ
八月十五日の名月
いざこゝろ 十五夜 観月
不知夜月 既望。我早曉。二
秋八月 八秋。倫減。光艶。
朔缺。十六夜月 望夜。十
六日の月 秋の十六日をいふ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

歌 新二帖 為家

秋風に雁ぞ列雲をいて申しでんかぞこるらいさよひの月

詞 きのふの光はみえつるいさよひぞよはきほど尾山のたにさすひのそる

俳 そうもやや月のいざよう山辺の山 松尾

立待月 今年十六夜月。 ○書経曰、暦象日月星辰、敬授人時。 ○今宵

△ 暮て須臾の間をまち兼ぬるといふ名のゆゑ

連俳 八月もすゑの三秋ともいふ

歌 八月十七日の夜ことに曇也

新古今 寂蓮法師

我門にまつ人こずて夜もすがらきりぎりすなくあきの山里

俳 当信子 拙 △ 十八夜月 待宵 小山川

居待月 △ 十八夜月 待宵

△ 出るをまちて居てまつの義なり

俳 観音の坂下休茶やの辺 月 春波

歌 新古今 前大僧正慈円

雲のゐる峰の小雨はれそめてさびしさつのる秋の夜の月

歌 伏籠月 ○ 腹籠月ともいふなり

伏籠月 △ 腹籠月ともいふなり

△ 子供の生れたるを伏籠の内にかこひおくゆゑ名とす

△ 子供の生れたる月を伏籠月といふ

△ それがうへて後の義なり連俳又は妊娠の限なり歌ことに夏ともよめり

歌 拾玉 慈円

編妻のうげろあしの葉の露ぬの月のかりあけのそら

俳 伏籠と伏見ものたとびる 野水

更待月 △ 二十日月 ○ 二十日月 ○ 二十日の月をいふ

△ 廿日の月までの割合の名なり

○ 雛諧にはふけ待の月ともいふ和歌には廿日の月とのみよめり

歌 雲のゐるそらをそよ風 ○ 二十日の月のさやかなるまぐれ

連 名もそろふ廿日の月なき夜すがら ○ 雲お ○ 月 ○ 雪の ○ 至

二十三夜月 △ 暮夜すがら月 ○ 月雪の ○ 至

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

蒼薄の郷のうれば月ごのつらを
ならべ俤の幣立がそうそいひて拝
むなり 正五九月三ケ月の名月称
ひらく夜おの月を拝め
ありあけのつき

有明月 十六夜以後の月ごろ
ろ〳〵夜のありあけの也

(秋)みねのつきなくこゑの劉よう
あつつきだうりうえのかなー 忠孝
朱雀
心の深きを知れてこそえさしてー
鶯うり出るありたけの月 宗遠
(連)名所の月をよめるかろみ也 昌純
(俳)あり明やたのみ月出る石のあら 正秀
(狂)人の世はひま約諾とひるがー
物そひ月げもありたけの影 信海
つくことまろ

待月 詩哥ことに重きところ
歌もれんぼも秋の月を待
ふ俳の三枚かり
(俳)待月や袖そも夢れおなく後架の者
(秋)山のとは雲ここそぶんひうえ
つれをく見えて月ぞまつ 仙洞

残月 月のまたく夜の明ぬる
をうらみ十七八夜の後の
(歌)まさんつゆのをかりぬ
松のみどりなるらの陰の月 西行
のこる夜もそうたの月のかげ
さえそふれ出ぬ月をたのまん 敦頼
(俳)残りまきこんなりのころ月 誠人
(狂)月新いろる春うたりあけの
みつくしのとそよのこもろ 貞徳

照月次 三月月の比より九日以後の
月の光を称美月ごろ
(歌)あの杜面さてろ月うこそぐまが
こよひそ秋のこ節なりけり 源俊
次を照そうひるしてか水の面く
いひ出一ふかりけり

星月夜 星の光りみちて
月夜の中に猶こまるを
野月夜ともいふ後拾遺山里星月夜
そよく吹風ものかまそくに星月夜

の年くらく年ごとのつかる春ごともつ
ゐ新春雑意ごとをそう

(秋) 松川百有　常陸

我ひとりかまくらの秋ぞえゆけば
かり一月春ごそうまし一かりけん

身入　秋風の人のみうらのまこ
こむやく秋ゆうりのん

(秋) 道忠

闇のべやうらもうらもうら風の
みるまむかぐら秋いまふくり

(蓮) みるまむやうらもうら夜秋の風　紀巴

(俳) みるむやうら多きもれ秋の雨鳩水

秋の聲

うんくもかく物ふうれて
ふしく鳴きまうふ

(俳) 郭公の幽栖うそし秋の声　梅水
ふくんでも鎖やうまく秋の雪　湘雪

(詩) 古文秋聲賦　歐陽永叔

方夜讀書聞有聲自西南來
者　永叔が夜書ヲヨンテ井タルニトコトモナシニ
コエカアリテ西南ヨリ來タル

ソットシテコレヲキイ
悽然而聽之曰　テ玉フコトニハ

異哉初淅瀝以蕭颯　カハツタ
コトヒヤ

ハジメハサラくトシテ
ニワサビシク

忽奔騰而洋洋水ノナガル、ヨトガスル
如波濤夜驚風雨驟至　下略

ナニカ　ヒヤ　スッテクルヤウナモノアリ雨風ガ
ニハカニヲコッテクルヤウニモキコエル

秋聲

(詞) 松乃風ふーき。ちそのこる
秀衡。死野。秋風。まつ春
松乃こ秋。そこうへー。うぢ
こゝこゝしー。ゆうや。うぢ
ら。森の幻茶。死く。死を
ふ釈　尾そる。蛸死ひく。

(秋) 松乃野へ咲く死ぬ秋
こゝはせくそのこる

死んこんくんやうふぬぎて
私のうきうつしはるう名　経信

秋

ぞ こゝろ 悲しく 見えわたる 古郷
の 雲の 森の 山ふところ。白露・露
ちる。かげろふ しぐ

連 いろ〳〵と 女の 手もとに 秋の 空
狂 うき女の 手もとに 秋の 空
手もとに 秋の 空 かげろふ 春オ

秋山

詞 雲のうごき 風さし 秋の 空。
秋の 山 ふもとの 里。

歌 秋ふかみ ちりそめにける 紅葉
ばも もみぢ 秋の 山

詞 雲のうごき 風さし 秋の 空。
秋の 山 ふもとの 里。 柿ざし
秋の 空。 秋の 山 ふもとの 里。

右の外 秋の空 など 楓葉

俳 俤 秋の 山 如東

詩 秋山五字對句

望中疑在野 山形圍墨國
山ノスガタガ水ノクニヲ
野ニアルカトオボエル

幽處恰生雲 秋色露人家
秋ノヒキノ中ニ人カ住テ
雲ガ立テ出ソウナ

秋水 清く 澄りて そゞ
秋水 清く 澄りて そゞ
く 冷ゆ いろみぐり

歌 ろく風も 岩もり 水も 澄り きよ
山川 ろうや 秋いろ〳〵ん 時房

俳 我庵と いざ 秋水 拳白

詩 滕王閣記

落霞與孤鶩齊飛 ラクカトコヲクトヒトシクトビ ツトリトガ
イテシマウトコレハ。秋水共長天
一色 アキノ水ガスミワタッテハテシモナイ
ソラトヒトツノイロニミエワタル

秋水故事

莊子秋水編 秋水時至
百川河ノ
兩涘ノ渚崖間ニソギ牛馬弁
セズ河伯欣然トシテヨロコビ流
ニ順フテ行クサマ

秋夕

秋の日 れ多歌の 詞 など
秋夕 秋の夜〳〵 長き夜 長き

秋 秋ふかみ 紙衣 なれこそ 寒き
萩のうら風 萩の 葉 など

新古今
見わたせば花ももみぢもなかりけり
うらの苫家の秋の夕ぐれ　定家

新古今
さびしさはその色としもなかりけり
まきたつ山の秋の夕ぐれ　寂蓮

新古今
心なき身にもあはれはしられけり
しぎたつ沢の秋の夕ぐれ　西行

㊂詞 梢ふく風もしる露そむしう。虫も鳴音。夕ざれば。荻そよぐ。涙露る。鹿鳴。いりあひの鐘にゆふべをしらす。狩とるきゆるべき雲。もろこしに。もろこしきこゆ。鴫の夕霧。

㊂連 鳴ぬる夕べや鹿のきく声　昌休

㊂俳 人寂さぬ秋のたそがれ秋の夕　和及
両国もくれの秋の夕べかな　其二

㊂詩 秋夕詠　超延

白雲深處野人家　白クモノフカイトコロニシヅカナヤマガツノイヘアリソウナ
倚杖閑吟日未斜　ツヘヲツキナガラシヅカニギンズレバマダ日モクレズ
秋ヲヒカヘテ詩ヲ吟ジテイレバ夕日モクレテ　江上數

峯青不盡　江ノアチラノカズノ山ノ秋ゲシキハ見レドモツキヌヤウナニ
晩鐘殘雨入蘆花　入相ノカネノコヘムラサメトカ一ツニ成テ芦ノ穂ノハヘシゲツテ有アタリヘ入ルカト思ヘバ日ガクレル

△秋夜

あきの夜 秋の夕べは日暮るる秋の夜は一夜はあいださらへ

㊂歌 秋の夜の長きもまだ明けぬ秋の夜よいくさ花の縁さめし　つゝん　資平
あきの月をいくたびまちし秋の夜よゆふつげ鳥は鳴きさめやはせぬ　実隆

㊂詞 うれしく長夜。あかつきいそぐ。きぬぎぬ。ねよ行のよながき。まぎぬる。をとめる。とりなきを。うげつくれ。ながきそひ。

㊂詩 秋夜詞　無名氏

高秋夜分後　アキノフカイジセツヨナカバカリニ
遠客雁來時　コキヤウヲハナレテトヲキタビニ居テノミヲキケバカナシイ
寂々重門掩　モノサビシクカドヲサシコメテ居レバ
無人問所思　タレモモノ思ヒヲトフテクレルモノハナイ

混雑

七郡ニ在日令制令等本ヨリ出ル

龍田姫

四都ノ西ニアタル龍田ニ居ル神ニシテ秋ノ七草ヲソノ出ル道ノ傍ニ名付ケシ女神

秋 我ゆくハ七日ハヲソず龍田姫ゆめ此ヲ風ニ吹ナ

注 ヲソハ遅キ意ニシテ龍田ノ姫神ノ名ニ負ヒ吹ナハ吹ナ風ニ吹ナ

秋宮

皇后宮ノ御事ヲ申シ奉ル言ニシテ東宮ニモ春宮ニモ皆ヨシ有ル事ナリ

秋宮ハ秋ノ宮ニ在ス皇后宮ノ御事ヲ申シ奉ル言ニシテ春宮ニモ皆ヨシ有ル事ナリ

律の調

物ニ律呂ノ調ヲ二月ヨリ始メ秋ニ至リテ調ヘ整ヘ秋ノ気ニ応ズル律ニ成シ奉ル

秋楽

これ盤渉調の曲なり。盤渉調の曲ハ秋の甘ヨキ萩女郎花の風ニ吹レ靡クヲ感ジテ作リ出セル曲ナリ。此楽ハ秋酒ヲ酌ミ交ハシ琴ヲ弾ジ笛ヲ吹キ合セテ秋ノ気ニ応ズル楽ナリ。

秋楽仲人ノ小ノ口ノ一ノ調曲

秋楽ニ長酒ノ部 秋人

注 数多ノ秋楽ノ中ニ秋人ヲ選ビ出シテ長酒ノ部ニ入レシ事ハ秋人ノ秋ノ気ニ応ズル事ヲ専ラトシテ長酒ノ楽ニ用ヒ給フ故ナリ

萩の下露

萩ノ花ノ下ニ露ノ玉ノ如ク溜リ居ルヲ秋酒ニ譬ヘテ云ヘル歌語

鶉衣

鶉ノ羽ノ色ノ如ク継ギ合セタル衣ヲ云ヘリ

鶉衣ヲバ打ヤ熟衣ヲナドナドヲ甚ノ事

田の庵　田の畔の real のいほり
real 秋の風猶うそ寒にいのこされて
real 田のうこんくさ伝蕎を刈
real て田の実穫るるや玉蜀天気
real 小の雲こまやかに真白き
real 雲こそ伝蕎の花
real

小田守　乱田をちらす民を
real 小田守猶蕎の穂
real 雲みな小雀をこもるなり

(補)小田守の水汲まれ夏掘り桃翁

稟山る　real 稟藜 real 雲
real 深め。むら〳〵
real 田よあるる畔〳〵ひくゝなり
real 伝都 real 昔を實伝都〳〵玄人
real 稲を守りて鳥獣を驚かすを
real 伝都〳〵
real いと三才圖会 real 稟山まと伝
real 都〳〵とよい浪花伝都 real ソホツなり

曽富騰〳〵 非代巻之秦 real 深水の
real 玄實伝都〳〵玄人
real お数よく解せざる者の伝なべ
real 〳〵そかつ〳〵ふつかるちがひ
real そうろうべ〳〵今の深めも玄實
real 松茸より〳〵しき先新玉ぎの数
real

(数)うづきの山田をたてそなへて
real 地のぐたのくを人力いくたり
real 山田守そうめの刈てそうな〳〵
real おそくねまば同人もち 玄實
real 玄實ゞ猫を守りしその数
real

(補)人でさ人〳〵ふる葉山まるる信徳
real 一俵もち〳〵てかしの弓矢の 蓮一

(注)名坪じる名猿人の養笠を
real ひいてそなさね宿のみぐさ 景天

漆水　今世の民の製をうるわい
real 渓洞のあれ荒るやうな
real ちうみて用〳〵ゆくるる世 翁之
real 引板鳴竿さを日稼ぎて製さ実を

雁 ものさびし板のよる雨うけたる板へ雁をえがきたる

(俳)秋の夜は淋しき雁掛さし 如泉

鳴子 縄を長くしてはなるゝまで引て

(歌)秋ふかき門田のいほにひとりゐて人もなき世のこゑぞすごき

引板 板をうへ竹をもて縄にて引

(俳)我袖にそよぎまほしや秋の田の引板のこゑ

(歌)何となく寂しくもあるか秋の田のひた引こゑの里の西より

鳥竿 竹と縄とをもて引なり

風よりもなるこえ〳〵竹のさきみのるなと付てをる也ひ〳〵

(歌)先うえて栗かきいれん穴ぐまの竿のもとをる追〳〵うるひ

蓮 葉はやゝひびきて秋ぶかき哉 去仍

(俳)はす葉うて擣〳〵水の里 文王

燒鼠 馬の尾を焼てもろきの鼠其鳴とゝいてまく〳〵

とゝこれをやきまろ〳〵

(俳)焼栗やおしい中の切〳〵 蕉雨

以部うは三枚のつゞき

草木

芝 本を出す

柾 まさきのつゝ〳〵まさきかづらも

もろ〳〵けふなん三本の方

葛うきを二つ合て作りし月なの

まさき教雅あり〳〵雅薗

牡のもの紅葉〳〵てそ落をる

ものこれまの柾なり矢 紹令

劉山 ごまよう和及び紙内の山

まろうのうそ人家に植る物

あ〳〵人家の籬に植る三本〳〵

〳〵るい牡紅葉せびた秋ふかめる

まの三本〳〵遠〳〵之

(俳)垣の石ねけて柾のうつ〳〵る千代

（歌）新古今
みやまにはあられふるらし外山なる
まさきのかづらいろづきにけり
新古今
うつりゆく雲にあらしの声すなり
ちるかまさきのかづらきの山

へ萩（はぎ）
まさきの大なる物を俗に鬼萩（おにはぎ）とも云　風につれて葉のそよぎあふ音の
すゞしくそよぐ和萩は大なる風をもちたり　蘆萩（ろてき）とよびて水辺に生る
又蘆柳のなかに暖神の
みなく屋際に植て葉のそよぐ音
まて風のまでやうなる心事らしき

（連）萩の葉は朝霧なる風もなき　専順
吹かへる風やさとさ葉の萩乃数　仝

（俳）萩をふく風なかりせ秋の風　杜月
さびしさ数多まるまる萩の風　嵐雪

（歌）夫木
ともすれば物思ひそれは秋やどの
荻の葉そよぐおとに風ぞふく
拾遺集
秋風のよそにふきくるをとはの山
萩の葉そよぐ音のすゞしき　中務

△薄（すすき）
△まのむすき△一りもすすき
へ尾花（をばな）ともすすき、尾花なる。

すすきは葉の多く叢（むら）をなしてある
をぞ云　葉多くありまる物なれば
總て此葉の名とすなり　生ずる
所は長にして又もゆきまぎれて八月
白き花を開き穂をうるに形獣の尾
の如し　故に△尾花ととなへ　歳内に
ても穂茎を出すれば早く穂をつくる
を見かうる茂葉をまじへきたる
まうれも亦多く出ざかりて　薄の
花のぞくれ穂あかりの秋の尾花さ
すゝきかけて花すゝき一封もすゝきはしげの
をなべし然ども今稀樹家にそれ
一本をたてきそ別の妻手の用あ
全くと世のならべし。○篠芒と
云ふまざらね出ぬえらぬとぞ。
またやまきすゝきは塗彪あり

（歌）夫木
こゝろかはいでねどえの萬
風ふきてまねきそよく　政仲
うちなびく萬の下枝いはすゝりつく
みちふく風まるびく村すゝき　光家

詞 なびくをしき。まひく落。彩
勝の落処。村ごとき。一村落。
庵。まかき。秋風。おとろ。

擬 いそのみ 何論さむとぶ落ろ其角

秋風のとがさうそむく落葉哉

連 秋ふく人が名残なびく落ろ紫紙

糸薄 糸細く糸のごとく長きい
にふさふ風ぶりのもの也

△ どすくきと生ひ立ちたる

擬 いとどきこつく 根のくろみ方外

独 糸をりせんあさぢふ汀の蛍も
そぞろ〳〵ぬけるいとどきうろ

連 糸をくきこうろうろ極楽て
あさうろ糸のなれをんせんをとうろ
くどん △ま葛今くそろ〳〵。

葛葉 葛とまるく裏ふ秋風よ
いるがへとうらべ秋風よ〳〵せ〳〵ろ
ろべ〳〵葉毛く葉その葉之分て
葛くやい〳〵ふく表あをろ〳〵
白〳〵秋風よひるうろ表葉の

うらの葉のうしが裏人葛の葉
のうら〳〵ごと擬て人の恨の葉うらに

歌 なまさうろ約の人恨のうら葛ろ
まうろうろうろうろをろし 物洋

うらの風は葛うろ裏のこうてろし
うろ〳〵んとろうろうろめん 明珍

詞 うら吹うろ風。吹うろ〳〵。
う風。京の秋風。葛もとまる
ろ。うろせ。うろ〳〵むる。

連 葛ろん風を裏つく葛葉ろろ 国心

擬 さうもの風こうねこうろうろ葛乱葛 蓮二

葛の葉いもんぐの山を〳〵うろ言水

往 葛り葉いりろ葉ごと秋ぐ〳〵ろうひきて
風ごうし秋をろ とろ葉の武蔵よ 夏木

忍草 擬 落葉のみ奇 夢ごとしく
うろこ歯留橋の葉のごろ物と
うろうろ〳〵秋ごとへしりのいろ
たがうろ 補遺の葉く 倫丸

擬 志のうろ宙ごうろ武蔵北 浪化

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

蔦 【異名】龍胖。赤葛。五爪龍。赤潑藤。烏蘞莓ハ漢名

。秋の頃ハそれぞれの家の壁に植て

秋紅葉なる蔦ハ蔓物の惣

名なり。名ハ鄭谷に多くして内

も秋紅葉せぬもあれど連歌の

法式の書にも蔦をも紅葉もまぢく

そうじ秋なりとあり

芭蕉 【異名】甘蕉。芭苴。天苴 ハやまとぜせを 九月の季なり

「山掛る」の風ふけばさそふ夢も人の世の緑まで

うつ葉根てたのむ宿ぞりのうき 蕪村

【歌】舟ともかう帆になりの風の芭蕉哉 一晶

「ひろひ」風の葉よなるむ芭蕉 羽水

【詩】七言對句 詩礎

長葉臨風標緑幹 清更妍

チヤウエフノカゼニノゾンデ リヨクカンヲヘウシ キヨラ(ニシテ)サラニケンナリ

赤心凝日吐丹誠 不眠愁

セキシン日ニコリテ タンセイヲハキ ネムラズシテウレフ

景天草 一名救火草 【異名】慎火草。掛壁青。天竹 【和名】

いきくさ。ちくさ。さてさう。まつるくさ

くさ。無葉草ハ見出るものなし矣

(?)人家の屋の上に植えて

掛置ても枯ずして緑を

栽る屋又(?)家にと書をもちゆる

なし。此(?)草も(?)枯葉共に用ゆ

草花

花。秋の錦 錦葉花花

くさのはな ハ種々の花。百草の花。秋の

草あまた秋に咲花をまなびて 萩 くさ

女郎花などして其外何となう

ど秋なる花をあつめて歌ハ秋の

ちぐさとも又いはる。 諸

【歌】ぎようなの(?)内(?)よとぞ見たり

いりたる人のくさの花のあり(?)

さまざまの花よりも露の置(?)人

ろうの声きこえ人ぞの秋の野

【詞】ちくさ。花の色。ののちくさ

のいきう。秋萩ののうみの錦

秋卅本

(連)翻雪を蔵めうち乱れ飛ぶ折節
咲きうせもてはやすらん

(連)菊の花や枝もうつくしに枯あらく 蓬二
風もうく ゆかしの花の多く咲るうち 蕉

(狂)花の雲鐘は上野か浅草か 去来

(詩)草花詞

幽閑不附 曬蘭芽 スカニサセテ

トコロニ咲テ蘭ナトノ芽ノアタリニハヨリモ
目向江濱 占

道傍 ダテトラスミドコロニシテ植ル

晴日暖開粧景 一日ノウチハレテモ秋ノ

アタヽカナルヲイフ

香蒙詞客入 クレタル花ヲヨソホヒタテヽ

吟郷 花ノニホヒヲ詩ニウタヘハ人ニオホヒカブラセテ詩ヲヨマスルヲイフ

鳶頭花 (異名) 洗手桶 紫雞 ○花の形鶏のとさかに似たり

(俳)去ル秋ねぎらひ懸る蕣哉 宗因

雁来紅 ヒユノ類

(連)かけ乞ふて乞ふて今日の夕月夜 連二

(狂)雲雀より空にやすらふ胸の内 芭蕉

(特)翔雁南来塞草秋 葉ゲイトウノ雁来紅トニカク南ノ国カラトビワタル。未霜紅 亀

已先愁 マダモミヂラヌニノ葉ゲイトウハ

繰珠宴罷帰金谷 一美人ガ酒宴ニンデカラ金谷園ト云所ヘモドリテクルヤウテクセモノ

夜不収 タカサ七尺モアル珊瑚珠ヲ夜モカケテ有ヲイフ 白々

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

紅々絢綵霞。白イト赤イトガ綵ツタ。杜
丹雖好不知宅ボタンモヨイモノジヤケレドコノイロクノウック
シヤ六。無端蜂蝶休相近。此
種元來不是花是ハモトヨリハデイトウモニヨツテ花ハナイホドニ

△白茅　ちがや　つばな　△茅薹　種類　沙茅○葦　菅○香茅○黄茅

春ハ芽を出し花をひらくを。そのころ小児好んで抜きとりて小児食し
て甚益あるべし。根を茅根といふ
又俗に倒まの根といふ。菱桔で癒
るゆゑくすりにて用ゆる。△小
がやといふハちいさきかやなり
△高かやといふハたかく立のびたる
をいふなり

㊀狂　恋しくもまつらん秋のもりにあけて
いろづく秋のそてのあやのせば　保堂

△萱刈　かや　かる　△萱背　△萱軒端　○茅薑
萱の形ハちいさく萱の形ハあり

ものゝ秋刈てやね根をふく事いへるより。されバ
茅屋といへるもありて諸説
あるもあるべし。茅ハちがやふく
縫くまてといふさき家をいふ
きもし、こまかく萱に別種あり
大なるをすゝきといひ萱のうち八月
の頃に出る△萱背△萱軒端など
植物には萱をあらはすまじき
名理なりといふ此名物ハ秋の季に入也
なる事にて、用ゆる事ハよしと河傘に出たり

㊀歌　かぎりあれバかやが軒端の月もみん
まつねん人の行をまぬれそ　後鳥羽院

○此歌ハ後鳥羽院さぬきの国にうつされ
給ひける時、ふるさと河より都の制にようて
かやが軒端にとほき都を守るぞ
ゆかしきなり

㊀俳　かやかりてさしこむ峯の松　立甫
　かやかるや何のうしろ帰の月　湖山

㊀狂　こがらしハとかくかはく家をとふの物
いろいろかるとはこれをかうや　道喜

角觝 艸 艸芽の萱をつみ生にて食ふ 小児のたいむとよんだ 桐撲愛よろよろ根もあらく剔〳〵よみさる花附抓でカ草ともよめる

(俳) 茎はみじかくして葉ばかり出 乙由 ちまひ芝川垣のちぎり哉 許六

犬子艸 艸名 尾艸も出一名 艸の名 拾芥抄 秋の庭のぼこの栗の穂のやうな花の黄なる

(俳) ころ〳〵と熟栗もいのこころ 杉風

(狂) 秋の野艸のごろ〳〵穂よりもろく枝をくはれ出中ぐろ〳〵 みる

(狂) 下のつゞ俗てなれぬりのよいのこころ まんくとにいるぬるりくり 柴角

萩殿 萩の戸・萩の中 清涼殿の小の方と萩を植らる 名ばかられるえ 禁秘抄 萩中老の御所と萩よめぎりて秋の花ろ〳〵極らることぞ時代よりて殿もろえ

(狂) 後千載

萩の戸の花の下より所満ろ ろくせの秋のうげそうのまろる

(連) 萩の戸のうろ〳〵ろ 北のゲ 昌北

(俳) 萩の戸やろゲ〳〵 萩の戸 浪化

(狂) 萩の戸りえいうくともちぎ〳〵ぬ ぎくりち釈の女房ろりり 柳里

花壇 花圖。艸の花の畑。艸の名 くまの萩 秋深 萩ろえ

詩 朗詠集 前載

多見栽花悦目 傷ラク花ヲ入テ目ヲヨロコバス 人々ヲ。先時豫養待開遊ソノ時々見ル ニ

早ク草木ヲソダテ、花開ケ ラ待テ遊ニヤ

家僮偏 ワレヒトリ身ノヤケトメニ。そこら者ガフサウナニヨツテ

樹春栽秋草 秋春ノ末ハ春ノ秋ノ草ハ秋ノルヘシヤ

(狂) ろくでもない艸のあるはやうまろく 出てばあ名ろりくり 秀峰

ろりぐさ 破笠。一名破芭蕉。艸名。桂舎焼。

鬼灯 姑娘菜。非代春之破笠

カ、チと訓ぜりは又月さそるを
うつき秋実をむとぶ

(俚)農作をおこたらせむがうむる 酒主
名刺や医者感一ていきぐ心の腰 玄志

(狂)みづさいろいろの月きよ宛あけて
かくごときんぐいろなく 幼年

新番椒

(漢名)番椒 (和名)番国そるひと国の
まめいぬ元南蛮とうき

うりに形番椒とよべど天正年長の比
初てわたりしと伏見より栽始まりそうき
年うんぬ其外種類あり

(俚)石菖とうの根うえや屋ねし 北越
珍りうれ牡やうけ約そぐし 蓮二
多番椒漬 田夫えを数の郷ぐえ潮十
日ぐえ

茗烟草

(漢名)烟艸 (異名)相思草 (和名)
吹婆姑。還魂草。葬。

布凡

○蔓艸より上へ七月と美
なる名糸瓜。絡緯。紡線。
なるそらうくへ千ごとなり雲傍之
通世へうちきれ若き物をそく田楽

とし食用よ死り

(俚)うくとをうるのうまぬ歌 由之

(狂)世のやまぶうとうみのうえ
うんのへうきれのくのうえなり 綿屋

薬用 艾の汁ろうそくを加り水をいく
びもねるべし一生寒をまる

薑

(漢名)生姜 (俚)そでうえや紫い
えうまびと根いしうえ 露川

(狂)うくきせとうんと生姜と口ずうう
えうり汁もみそば加でも 若艸

牛房引

(和名)悪実。一名牛房
○きたき舎。うまうぐき

芋

(異名)土芝。蹲鴟。蚪芋
(和名)露丸芝。白見芝

芋の種類多し一年草えい十日程
を蒸ぐをり煎るべし一回ぐ水去
うりて煎も変まり回石の方をみうりて俗名もあるなし

頴の芋

一名紫芋。吠芋ともの
○浜の系芋村丸系村

のもの天下に多し芋の如く大にして厚三分斗の扣あり芝と合煮きよいものゝよくこえたるもの

(俳)一雨のあとや芋のすき刈　玄考

(狂)秋来ぬと教へ顔なるうんでうく葛の葉のかくれ住ものゝ如きのいもなどそうそう　自見

葛花頭　(異名)山葛。狼牙。徳皇　山薬　○雅都多ゝ

ゝ多くんどうを野山に多くうへ山菜ともいふ。里に栽るものをつく根いもよく煮ても焼ても甚おいしと。苗花秋の頃時こそ風水時候よりかんじて艶よき事なるを古代より作くる由なるべし

(俳)深切にいもが垣根や山のいも　梨二　(狂)秋風や藪もとしらぬ葛の葉　芭蕉

零餘子　葛の葉の腋にむらと生ずる　食用とするなり

甘藷　えびるのごとくにして蔓生なり　葉を食用とする

果　この字は木の実の総名なり　(俳)深切

(歌)新勅撰　夏木立ゆく俤のつれづれとこの実ひとつなりぬるかな　西行

(俳)この実ひとつ喰ふ間の月日かな　明る

柿　異名　赤実果。朱果。霜長者　(四)

(歌)枕草子　木は　柿もそうは見えて枝ぶり葉ぶり　芭蕉

(俳)みごとさや枝もたわゝに柿の秋　宗長

(連)芭蕉　後の月いざせよ柿の本　宗長

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

(俳) 柿そも是ゟ〳〵張屋るさ考
柿の木やこゝ自慢の紀伊の国

(詩) 七字對句 詩礎

垂枝星實纍々熟 千顆蜜
タレサガリタル枝ニ星ノヤウナ実ガフラ〳〵トシュクシテアル 千ノ蜜ノヤウニアマイ

帶葉霜皮顆顆乾 一林霜
葉ノツイタ柿ニ粉ノアイタ皮ガヒトツ〳〵カハイテ見ヘル 一ハヤシニハイニシモ

柿の種類 御所柿和尚柿
村より出るも乃至上こゝろ有よ

△遠徹柿味さよ〳〵として肉を口に通るゟ〳〵ゆう〳〵

△朱柿形たまのゟ〳〵こ子リ小形ゟ〳〵

(秋) 蕎麦法師 泰完集

霜掛けるこゝろ孔柿をのぞう〳〵ふくめやき雪ゟりのようなる

△筆柿かさら小ゆて長く能筆のごと〳〵方ゟよりこと山おとよ柿こゝもつふ〳〵

(俳) 筆柿やあじの常こ愛まれ 圓房

右の外に八里る柿。放光柿。田倉柿。久保柿。若狭柿。

名称数多〳〵 聞くの水ゟようて味も那もいろ〳〵くうまもう

醋柿 醋柿を石灰ゟ渡し〳〵みいそべ〳〵の灰けよ二三日渡〳〵てゟ出せが味甘く熟るなり

(俳) 法師や渋柿をうけ我こゝろ 其角

包柿 柿のさきりのを黒ゟ紙ゟて称ゟ自称ゟ和歌ゟす

白柿 渋柿を色にうるきりて乾があら甚美ゟう渋の出柿ゟ反柿と柿ゟ〳〵ゟ墨柿ざをん物ゟこの渋ゟ佳

柿饅 渋柿を取ろ〳〵水の粉よ和〳〵蒸〳〵餅ようす味

(柿)柿渋や世と味みくやと人 初会

梨子 異名 玄圃実。百菓家。

快果。菓宗。玉乳。蜜又。

水なし 山梨 まろ〳〵

種類

△木梨 △近江梨。松屋梨。堂前梨。二度梨。六郷。津軽妙

田あり。り出る大なるものハ風あり

まゝ又二ツすのり大概〳〵近江にて

〳〵志加梨是より出る日数多き

梨芦浦数多きより出る宝剣又

〳〵ハ此名より出る

(ゆ)六郎 永寛庚午冬

年〳〵ハかり〳〵ばかり〳〵ばを〳〵のたり〳〵ぬもみこそたりぬき

(能)しい梨い雅よたのてうる祝りん芭蕉

梨やいく秋の秋此秀の味と冊

(柱)けあげたる麹のごとくふくらく

産の搬よりやりの実 未将

のきのつまよう〳〵

彩妻梨果 数根のまゝ〳〵 実をそ彩いのの

つまへりとこ戻なり

(秋)かうべきタかさまく流なり

ふるきのさいのつまる〳〵の元

秋田 (連)山松の木のごとい形

はく秋田うる 宋祖

田のうる 稲のごとく(雁)田れい

(ア)

稲 (異名)△水景神 ○富神 八雲の妙也

△稲葉多く七月の季ハ用也稲

葉の雲いと月の処ハ稲も七月の季

稲の伏委く博物筌ハそ

里ふ ゆうをの雨風いうはなのごと

雀うくる秋波のハふ

いろ〳〵と門田のいろか吹ふこと

風の神ふくゆくもつくる 龍生

(綱)いうはの波ふをくての稲のいるも

落。いうはる。いるなり

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

（俳）絃間に稲を閲する声や秋の風　正秀
「穂に出て聞ゆる稲の旅ゆくる　蕪村

△稲舟（いなぶね）㊇
いなぶねとよむ哥人あまた
川に多くよめり

（歌）古今
もがみ川のぼればくだるいなぶねのいなにはあらずこの月ばかり

廿秋ふかみよりて露いかなれば
いかのをいかなるのみや波は何

及なく哀歎よせて多くよめり

（俳）いなぶねや波とのせたる浪の上　去用

△稲刈（いなかり）㊇
〇秋田刈ことを云（俳）稲刈や
鳴子むしろの数可考

（歌）山里の秋をきゝて風こと多き
田のいなの世にはなり　俊成

△落穂（おちぼ）㊇
そらが菴の年は稲からする
て落穂ひろふ寡婦のさまなり

ひろふ業なるを語とも多く詠り

（歌）伊勢物語　女をまかりける
いらまひて落穂ひろふも世に
我も田つくりゆくましものを

△稲干（いなほし）㊇
（俳）発甚まで稲干窓へ
手織る那　其角

（歌）さる田のおくての稲を刈干て
とり入れしは秋のまふれそめり

△稲筵（いなむしろ）㊇
真徳の頃は稲のほしさ
る面をことしてむしろを

発する中ちよる前に稲筵ます
又稲をこうれる筵をもいへり
秋に従くし妻くの補筵の論れ

△稲杆（いなぎ）㊇
稲城ともいふ稲をかけてほす具なり

（俳）天をそぶ年貢の稲木の小村　蕪村

（狂）秋の田をつくるさまや見る民
民の物のさかえてなりの　貞柳

△稲扱（いねこき）㊇
稲の穂をこきおとす具なり
世俗に扱箸といふ竹二本
のさきに稲のもとをはさみて
こく是を後家の手業とせしより
後家倒しとぞいふ今は

稲扱も千歯のみになりて稲を
扱なくなるは甚便なり

右狭の稲こき出てよう寡婦の業
多くあり 兵俗号て寡婦艾という

△ちんまい 小さき意 米。八月
新米 の事 也 書れたる
稲の熟 するの頃速き処を三秋と云る
(頌)孤し やま嬌岩のてら米水免
わさとろう

△わせ 早稲 稲の名。稲の
早稲 二種あり 樹稲の
米も大きく色赤く甚うまくの
ハンヤとも日本ようまるなり

△わろ 稲の若き
稲むしろ 稲藁の日和さす事 名林
(注)わろうで筵を作りきのわろの海
取るを云 猿 浪のまてうなど 由基

桃吹 稲の実の小き抱のてら
花の刻中ろう絞と吹出

秋生類

この部より日三秋へ
迄る生類を出す

△蘆 △蘆 △蘆笛 △蘆
垣へ蓑を蘆 △蘆の類

△和の異名 △紀美名 △稲名 △うせき
△もぐる。もぐり 潜 いれしお もぐる

異名 稚龍。若山乃大。芙蓉郎。美女。
菊女。菌仙。稲馬。掘穫。

○牡蘆の南あり 牝蘆の南ろ
牡と麓しるいふ。牡多激はて
かすり 数多の北と云る夜帰て
北を望ふ秋の夜名ろうる 三才図会出

△蘆笹 ろふの蘆の根ごりの
陰又の牡のはそもうをまれの
うく黄なたり蛾が蘆の害ふ
仰る有牡多く出て将人の 居る
何ずり〳〵近くよるを押〳〵 完又入
武の強さうけ元ろう秋の業なり

△蘆垣の田畑へ蘆仮をまし
おりうけたる垣

(秋) 古今 もぐる
もぐる潜く妖れ萩原朝ちく
多び行人を引とうまえん
秋元 もぐる

国立国会図書館 タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

「秋山の霧に友やまどはせるものならはし聲しるべにぞ鳴くゝ之

古今　いかせき　素石

「山ふところうかせのけらうきよに帰りも秋ざうらなかぞ見てわれ

新古今　紀貫名　素石

「かくらなるさやみれ山のをぐらに秋がうらくもひとりゆくら部

新古今　山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿のなく音に目をさましつゝ　忠岑

金葉　流れまで鹿ぞ鳴くなるひとう緑の鹿のなく風をみやまむらん　大進

続拾遺　「さをしかの流れまで聲をせつなきやゆふべかまれて慰しかるらん　倫従

続後拾遺　月前鹿　「まどむ月かげをよそにやぎ山の木の下かくれ鹿やなくらん　為資

山家　田居鹿　西行　「小山田の庵ちかく鳴く鹿の音に驚かされて驚かれぬる部

詞　鹿の聲。志かれ啼。鹿なく。鳴きまうひ。鹿なく山。花に鳴き。月になく。そのが鐘声。秋物。鹿。妻こふ聲。花にまなれ。林ばら。鹿べよりあれ。朝の鹿。霧の籬。鶴わし。雨そゝく。あはれさそふ。志がらみ。ふるさとの萩を。のまがき。むなし。まけ萩。よく鹿の聲。山下とよむ。とよむれ鹿の。うれけれなかし。さを門守の枝。あひお。うらに萩。

連　鹿の音に鶴なきける。心数。「月しらも月に鹿なく門田に　宗祇　「さがりの嵐が風吹けし　周桂

俳　小男鹿やみそれ聲より近道　其角　「萩の下のむてやれの鹿の聲　鳥白　「芸原の鹿に音を聞　紀菊　特苗

「鹿笛を谷の風ふきく　夜武　綾川

「陽女が下　鹿笛のなりける谷の秋の夜

㊟みちのくは秋の真へ　向田

「鹿笛の声よりくる後の秋のなかれの　波峡

㊕鹿ヒ字對句　詩礎

作對御花歸遠洞　何濯々
成群擒草過山林　更呦々

鹿故事　二女紫纈襦　捜神記。淮陳氏。

田ニ豆ヲ種ユ忽チニ二女ヲ見ル容貌甚美也紫ノ纈ノ襦ニ青キ裾ヲツク天雨フレドモ衣湿ナシ陳氏アヤシミテ壁ニ鏡ヲ掛タリケレバ鏡中ニ二鹿ヲウツセリ是ニオヒテ刀ヲ以テコレヲ斫ル

鴫　本草俗労とかいはれたり

△鴫早贄　△鴫の草茎。鴫が喩

○八雲御抄　俗労の

〔秋〕垣根には鴫のはしへたててあり
まで乃田長にこそのひきつく 俊成
「秋の夜の鴫乃はしがき〔と〕しいふなりけん
我もかずかく今宵乃風 読人
〔俳〕まつ鴫や鴫にはせ逢ふ夜かな 三惟

△鶍もどし △田をあらす鴫を捕る
を鴫をおどしとるなり
けむり乃用をなして〔　〕あり
く鍬をもていとしめて當夜を明し
てとるなり

△擶田 擶は田乃害を除くる
唐土にては四時にありて
秋を擶とす 擶は殺なり 秋の殺
気によつて擶乃名あり

△鴫 〔引〕田 △鴫の羽搔 △百羽搔 △とは
しぎ△たしぎ△かりしぎ
本名鷸 又鷸といふ 又田鳥とも
いふ 鴫の字は田鳥を合せたるなれば正
字にはあらず 樵鷸鴫甚多し 巳十八
和名 あり田鳥乃字の国に作るも義

〔詩〕夏て羽をわかちて開寂〔　〕きくく
鷸人の徽章 三才図会本草に出
○義は夜ふけて声がく羽音しきりに
枕 百羽がきこえ羽音をもいづ
〔歌〕あかつきの鴫のはねがき百羽がき
君が来ぬ夜は我ぞかずかく
〔兼〕かう衣とそ壁の露のうまくて
秋すら鴫のさ川てゝらとうれ 定家
〔詞〕百羽かくる。あさ鴫。さは
たちの鴫。たてる沢辺。鴫たつ沢
○鴫なく。門田。ふ川鴫。結びの気色
○羽音。あかつき。
〔連〕立鴫も門田をよそにて落る宵 柏
立鴫も月をみごろもねさきかる 紹巴
〔俳〕鴫立て言いそぐ鴫の法師かな 由慈
識月や数く鴫のあつら 去来
〔狂〕羽かき法師がさとる百万べん
鴫あかつき戸へ参り帰く 貞柳

△鶉 △うづら △斤鶉 △かけうづら △鶉鶉
△鶉鴉 △うづら 鶉

朱ぜんまい 俗ていう歌さいろく
漆州みそうこと合せてこれを搗の
名石ふうげくもそこふうく黒肌
ぜよ あるて疾むうふ血色 其血液うく
茎の伏〳〵窩と 其血液うく
搗州をうんでもんで居る武を
そうげん地うそこがんて安んぜ
ぬよ 室人 鼈居んそうく 茎子出
秋のハキ、コこの分如 △行鼈い
支掃んるれて居そうそん△駈
鼈い奮るよう仲合そうん藤性州出
△鼈の蔭△うげ〳〵れう〳〵不とそる
まむ〳〵そうく歌ようげ〳〵の
蔭いの九よりともよより△鼈
舞いうっを飼務のようう
△鼈細いうげ〳〵を更細なり

(秋) 山里九様の茶ゲく豆 夕日さん
外面のの〳〵ようげ〳〵鳴なり 室鼈
「山田寺ときれうせやう風うけが
ぬぜうびて鼈初ときん 後秋

(詞) 尾花ぐさ。そのぐふ〳〵と。秋
の庭。叩けうげ〳〵。里のうげ〳〵
。そうやう〳〵。きりのまぐれよ吟
。なのぐ庭寄く。野風。うん
野。霧の拍。たゆくむこ。共ま
くき。くろうげひく。

(俳) うげ〳〵て略之沢やまの浦 蓮二
「栗のやと月山う村や吟うげ〳〵 今

(狂) 秋だうり誰とかそうげきや
いまも 故郷ようてうなくうり真先
。

鱧 異名 巴鰻。紅文魚。鱸。漆屋。松江魚。

川よも海よもありよりく
名を異ふるふと廿へごとの人
(秋) 秋風ふとて きうる舟〳〵ろり
うの一せ〳〵 社客抄去ひく 平
「何〳〵文の爰にのうふうそぎこう
あまこやだ〳〵ん雑幻我を 人虫
「秋の夜の更井の浦よ再出〳〵
月よやあまた魁つ〳〵ん

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

(荏)ふとう 麩料理の名 ふくふとうふ 焼てだしよう 仙てそえうり 九利

鱸故事 スゞキノコトヘ

鱸膾 南部記曰呉人陳ノ煬帝ニ獻ズ帝曰

金薤ノ玉膾東南ノ佳味ナリト

秋風起 アキカゼオコル 晋書曰張翰字ハ季鷹呉ノ人ナリ洛ニ入テ大司馬東曹ノ掾トナル秋風ノ起ヲ見テ忽我故郷湖中ノ蓴鱸ノ羹鱠魚ノ膾ヲ思ヒ出シテ曰人ハ唯コヽロサシニ適スルコソ貴メ何ソ此數千里ニアリテ身ノ名爵ヲ要セシヤトスミヤカニ官ヲ棄テ呉中ニ皈レリコノ意ヲ和歌ニヨミテ

(秋)秋風や蘆のまろやの篶すゝき 紅花

名異 吹洩。鵞奥。汐鶇の海奥。阿浪奥。蹄涔

鮹

(酔)鮹やゝ水村山廓酒旗風 崑雪 言水

(狂)芦のまろやの篶すゝき 芭蕉

舟かたぶくく笑 李里

江鮹 △小湯 △湖水 鮹のかたまりのやう

(秋)山almost 西行

つくねもやの水枕ほのかよふ

えぞうるあつま侍冷のうま

(鮹)うちひさしかしらの白なる鮹かな 素堂

元方延。鮹よ何くちびるし

鮹 鮹よ何くへゆく 元方延

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

特1
2961

雲を乗る騰と云して其名多く然るとも誠や此物上下ともに
鵬う（ほう）〈ほう〉判圓（ほう）御紫（ぎょし）又紫（むらさき）くもつふさう
△
不二の海濱うてけこ後ふいまし
のらくも舟びさし
（俳）ふなや一日に越す雲の門 雪芝
（俳）山いくつ雪に成ぬ雲の月 其角
（狂）なぐれの秋をうらめていまし雲
いふう出さう老にあれども 松下
秋の業 耳ぐれなく出るよしの訳と思
やきまして飯ぶようぜて耳の根こゆる
うるきやる
鰻樂 秋のうつろぎう落る舟
水勢みこうて屋事鰻と
ふそうちてそうる
（俳）去ぬうの秋ぶうこうろうろ樂紫全

俳諧作意早学受 全一冊
俳諧作意の妙論とをぐ
集め其影と鮮く記し俳句の綱
面句ことに数くのとくろも義を載ず
名人の句と加へ證しまを外前句の心
切字法式をと俳人俳ふるタ
海の發句俳諧数百句を出
ふるタ

俳林名句註解 全五冊
俳諧古今の名句と集め委く
弁解とう後と加へ古今句との
と蔵門名句数百則と出し外發の
過漏なく面句のろく出と

七夕由来之記 全一冊
七夕天の川の句と委くわしく記
かく俳名の俤とす
文化三丙寅歳發行

国立国会図書館　　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用